

(別刷)

# 図書館・文庫の読み聞かせについての一考察

— 1950～1970年代のかつら文庫と児童サービスを用いて —

有働 玲子      後藤 利恵子

生涯学習研究

— 聖徳大学生涯学習研究所紀要 —

第16号 別冊

2018年3月

# 図書館・文庫の読み聞かせについての一考察

— 1950～1970年代のかつら文庫と児童サービスを用いて —

有働 玲子・後藤 利恵子

## 要旨

本論文は、1950年から1970年代の東京都の図書館・文庫、東京都荻窪のかつら文庫の読み聞かせに着目して考察を行ったものである。特に、翻訳家でもあり、子ども絵本や本の執筆者でもあり、児童文化活動家でもあった、石井桃子のかつら文庫活動の意義を考察した。地域の篤志家による活動の形態や図書館の児童サービスへの警鐘なども含まれているものである。とりわけ、石井桃子の主宰した文庫活動の読み聞かせの事例を具体的に考察し、時代性を踏まえて整理を行ったものである。その今日性を子どもをひとりの、読者として尊重するという先駆的な視座を抽出したものである。

## 1 問題の所在

今日、読み聞かせが図書館・文庫で行われている光景を良く見かける。なぜならば読み聞かせが、児童の為の読書サービスの一環として行われているからである。また、重要な読書の入門であることが広く理解されているからである。

現在は、多くの図書館が児童室を備えており、そこで子どもたちに本の読み聞かせが行われている。この読み聞かせは、児童サービスの一環として行われているのである。そして、この児童サービスが、もしも子どもたちに必要だという認識がされていなければ、図書館・文庫等でも読み聞かせは行われていないのである。残念ながら戦前は、まだ児童サービスについての位置付けが明確にされず、子どもたちが自由に図書館を使えなかったのである。

かつら文庫は、1958（昭和33）年に戦後の公共図書館や児童書を備えた書店がない地域の中で、石井桃子が、荻窪の自宅に開設した子ども文庫である。かつら文庫の活動は、母親を中心とした大人に刺激を与え、全国の子ども文庫誕生のきっかけを作ったのである。そしてその活動が、強い図書館設置運動の推進力となり、公共図書館発展の中心的役割を果たしていく。

特に1950（昭和25）年から1970（昭和54）年代は、多くの文庫ができ、図書館法が制定（1950年）されて、近代図書館への取り組みが始まった時期である。そこで読み聞かせと結びつく児童サービスが、戦前・戦後とどのような

経緯で、地域の図書館・文庫と関わってきたのかについて素描する。次に読み聞かせを推進する児童サービスが、どのように図書館・文庫に影響を与え続けたのかを示す。さらに、かつら文庫の活動はどのようであったのか、読み聞かせに着眼しながら、考察を行う。

## 2 児童サービスと読み聞かせ

### （1）児童サービス

児童サービスは、子どもを対象とする図書館サービスのことで、『図書館情報学用語辞典』（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会、2013年1月）には、「公共図書館が提供するサービスの中で、特に幼児から中学1年生程度を対象とするもの、児童奉仕ともいう、…（中略）… 具体的には、児童用コレクションの構築と運用、本の紹介や本選定の援助、また、ストーリーテリング、読み聞かせ、ブックトーク、お話会など子ども向けの集会の開催や学級訪問などの行事などがあり、さらに特別な施設に収容されている児童へのサービス、団体貸出を始めとする子ども文庫や親子読書会への協力が含まれる。」<sup>(1)</sup>、と記載してある。

現在は、図書館は閲覧用とは別に児童室が備えてあり、そこでは読み聞かせが行われている。つまり読み聞かせは、児童サービスの一環であり、言い換えれば児童サービスが子どもにとって必要だという認識がされているのである。伊藤・山本は、「明治の30年代には読書そのものが子どもの成長には悪影響を与えと言われていた。ほとんどの図

書館では子どもはサービス対象外であった。」<sup>(2)</sup>、と述べており、その位置づけの変容に驚く。

一方、かつら文庫とは、地域の公共図書館や児童書を備えた書店が乏しい時代に、いち早く1958（昭和33）年、児童図書翻訳家・児童文学理論家・児童文学作家・児童文学図書編集者及び海外児童図書館見聞者である石井桃子が、東京の荻窪の自宅に開設した子ども文庫である。日本においてはかつら文庫の活動が、母親を中心とした大人に刺激を与え、全国の子どもの文庫誕生のきっかけを作り、図書館設置運動の推進力となり、公共図書館発展の中心的役割を果たしていく。そういった経緯の一端を本論では、児童サービスと図書館・文庫との関連に触れ、かつら文庫の事例を通して考察したい。

## （2）読み聞かせとかつら文庫

### ①読み聞かせの意義

本論において広義の読み聞かせの定義としては、読み手の肉声を通して絵本や本などを音声化し、聞き手である子どもに聞かせる行為とする。その理由は、子どもを読者として育成するような活動を広く想定しているからである。

『児童図書館と私』<sup>(3)</sup>の著者小河内芳子は、読み聞かせについて、「(一) 主に幼児、低学年のまだ字を知らない、又はスラスラと読むことのできない子を対象に、物語の楽しさを知らせ、(二) それによって目覚めた物語への関心や知識への興味がやがて自ら本を読もうとする意欲をかきたて、(三) 方言をも含めて日本語の美しさ、豊かな表現を味あわせませす。更に、(四) 読み手ときき手が感動を共にすること、そこから生まれる対話によって双方の心の交流を深め、(五) 読み手の大人が子どもの心を知り、子どもの本を理解するようにさせるものです。」<sup>(4)</sup>、と述べている。

福音館の編集者であった松居は、絵本は大人が子どもに読み書かせるほうが良いとして、「幼児にとって、絵本は自分で読むための本ではありません。おとな一母親、父親、保育者、図書館員などに読んでもらって、“耳で聞く本”です。“絵本は、子どもに読ませる本ではなく、おとなが子どもに読んであげる本”だということが、絵本を考えたときの前提です。また、おとなが読んでやるからこそ、絵本は幼児の成長にかけがえのない、大切なかわりを持ち、重要な役割を果たすのです。」<sup>(5)</sup>、と述べている。

近藤・辻本も、「読み聞かせは、大人と子どもの親密な人間関係を基盤として、文字で書かれた文章を、大人が朗読し、子どもは本に描かれた絵を見ながら、耳で大人の朗読を聞くという、独特のコミュニケーションスタイルを備えている。」<sup>(6)</sup>と、読み聞かせは耳で聞くという、独特の会

話だと述べている。大人が読んでくれた本を子どもが耳で聞いて、子どもの想像力が促進されるのである。

そして読み聞かせは、単に字の読めない子どものために、文字を音声に置き換えてやるだけの作業ではなく、もっと大事な働きが含まれている。おとなが声に出して読んだ本は、子どもが一人で本を読むのと違い、読み手と聞き手の間に独特のコミュニケーションが生まれる。子どもは、音声で聞くことによって、子どもの想像力が膨らみ、本に興味を持つことができるようになるのである。

このことについて東京こども図書館の主催者である松岡享子は、「声に出して読まれた物語は、目で読むのと違っておもしろさがあり、すぐれた読み手によって読まれた物語が、しばしば、自分が活字からひき出してくることでできなかった味わいを教えてくれるのだと思います。…(中略)… おとなが、子どもに本を読んでやる時、おとなの声に乗って子どもの心に運ばれていくのは、物語プラスアルファだけではありません。読み聞かせという行為それ自体の中に、おとなはどう思っているかが、子どもは、おとなの自分に対する愛情を感じとっています。」<sup>(7)</sup>、と述べている。

つまり、以上より、子どもが、誰かに本を読んでもらうということは、ただ耳から言葉が入って羅列するだけではなく、そこに大人の自分に対する愛情を一緒に感じとっているということが窺えるのである。なお、さらに、子どもが絵本から次第に多くの本を手取るようになるには、さらに子どもの興味や関心に沿った導き手が必要となることが多い。そのことについては、後述するかつら文庫の事例の中で明らかにしたい。

### ②読書環境への着目

また、読書環境について心理学者の秋田喜代美は、「読書環境を考えるためには、読み聞かせ以外の親の行動にも目を向ける必要があると考えられる。親は読み聞かせを行うのみではなく、図書館へ連れていったり、本を買ったりと、子どもの読書への導きとして、様々な関わり方をしている。したがって、読み聞かせのみではなく、読書環境のさまざまな側面へと目をむける必要がある。」<sup>(8)</sup>、と述べている。そして子どもだけでなく、親も読書について関心を持つことが大切であり「親が読書をどれだけ重視し、子どもが読書に参加できるようにするため、どのような環境を実際に準備するかが子の読書量や感情に影響を与える。」<sup>(9)</sup> 子どもが読書に関心を持つようにさせるには、親の心構えが大切だとしている。

『子どもの図書館』<sup>(10)</sup>を著した石井桃子は、「幼いうちか

ら、すなおに文字の世界にはいつてゆくための準備をさせてやること—これが、いまのおとなが子どもに果たすべき大きな責任の一つでしょう」<sup>(11)</sup>と、幼いうちから、子どもに本に親しみの持てる環境をつくるのが、大人の責任であると述べている。

子どもと本を結び付けるのに、親が本の読み聞かせをするのは、大事なことである。しかしそれだけではなく、子どもだけでなく、親も本に興味を持ち、子どもが自分から本を読みたいという環境を整えることが大切なのである。読み聞かせは、大人と子どもと一緒に本を楽しむという、読書活動への第一歩である。読み手が、本や絵本を子どもに読んで聞かせることで、子どもが物語に親しむきっかけを作り、読書の素地や、動機付けを行うことができるのである。読み手である大人や親や保育者、図書館員等が、聞き手である子どもとコミュニケーションを図ることにより、読書への導きを行うのである。

### 3 図書館・文庫の児童サービスの史的展開

#### (1) 戦前の児童サービス

明治期の図書館には児童室はなかった。その後児童室ができたが、14歳以下の子どもの入室は許されなかった。さらに時代を経て、教師の推薦があれば閲覧できるようになった。ただし子どもたちが自由に自分の好きな本を読めるということではなく、道徳教育の一環としてむしろしつけという意味合いが強かった。以下、紙幅の関係上、公共図書館の児童サービスの素描のみを記す。

公共図書館の中で児童サービスの重要性を認識し、その位置付けを行ったのは、1903（明治36）年に開館した山口県立図書館である。山口県立図書館長である佐野友三郎は、図書館運営について明確な考えを持っており、図書館を「教訓と知識と娯楽を得るための、終生に渉る補習継続教育機関」と捉え、教育の中心を読書においた。その読書の習慣を付けるには、小学生時代に良い書物に触れることが大事だと考え、設立時から12歳未満の子どもにも図書館の利用を認めた。そして、子どもが自由に本を取って見られる児童閲覧席を設け、それが後に独立した児童室となった。<sup>(12)</sup>

しかし、佐野のような児童サービスについて明確な考えを持ったリーダーを得ながら、山口県からは彼の思い描いた児童サービスが、全国に普及していかなかった。それは何故か。そのことについて松岡は、「佐野の周りに、彼と図書館や児童サービスについての考え方を共有し、協働する人材を確保できなかった、あるいは育てられなかったということでしょうか。時代が、まだそこまで子どもと読書に

ついて、成熟した意識を持ちえなかったからでしょうか。」<sup>(13)</sup>と述べている。この時代は、知識だけでなく、子どもの想像力を育成するためにも読書が大切だということが、まだ大人達に認識されていなかったのである。

1908（明治41）年には、東京に市立日比谷図書館が開館し、ここでは開館当初から児童サービスが行われた。松岡は、当時の様子について「開館後の日比谷図書館児童室は、たいへんな盛況を見せ、その様子が報道されて、全国的にも注目を集めました。その結果、その後建設される図書館には児童室を設けるところが増え、児童図書館の必要性や、子どもの読書の重要性に対する認識が少しずつ高まっていったかに見えます。その点については、開館七年目に館長に就任した今澤慈海の功績が大きいでしょう。」<sup>(14)</sup>と、今澤の功績を称えている。

#### (2) 戦後の児童サービス

戦後は、占領軍の図書館政策により、アメリカの図書館理論が導入された。連合国軍総司令部（GHQ）が、1945（昭和20）年から日比谷図書館を始めとして、全国主要都市に設置したCIE図書館（民間情報教育局が東京・横浜などに設置した米国式の図書館、1945年に閉鎖）にはすべて児童コーナーがあり、アメリカの児童サービスの実例が示された。

子ども文庫への造詣の深い汐崎順子は、戦後の児童サービスについて、「戦後の公立図書館の児童サービスは、子どもと本を結び付け、子どもに読書の楽しみを伝えることを第1の目的とし、その目的を果たすためにさまざまな活動を行ってきた。…（中略）… 児童サービス発展の背景には、公立図書館さらに日本の社会全体の動きがある。特に敗戦による大きな価値観の変化、占領軍であるアメリカ主導による社会と文化の急激な復興、高度経済成長にともなう社会構造の大きな変化と産業の発展は、公立図書館の発展と結びついている。」<sup>(15)</sup>と述べている。敗戦により、アメリカの図書館理論が導入されたことで、子どもには読書が必要であるという考えが、日本に広く浸透されるようになったのである。

戦後の、人も資料も不足していた1950年代の図書館において、新しい図書館のあるべき姿が検討され、図書館の本質的機能は資料提供であるとする『中小都市における公共図書館の運営』（略称『中小レポート』）（日本図書館協会、1963年）が発行された。これは、中小図書館こそ、市民の為の図書館であり、その為には最低これだけの条件を備えるべきだという基準を示している。これが、今日の図書館活動をあらしめる原点となった。

その後、日野市立図書館長前川恒雄が草案を書き、より具体的な形で図書館サービスのあり方を示した『市民の図書館』（日本図書館協会、1970年）が発行された。この本は、公共図書館を国民の知的自由を支える機関であると規定し、当面の重点目標として、①貸し出し、②児童サービス、③全域サービス、の3点を挙げた。<sup>(16)</sup>そして、児童サービスには読み聞かせが必要であると、「市民の読書欲求を高めるには、児童を本好きにし、児童を図書館に親しませることがもっとも確実な途であり、もっとも大切なことである。それには児童の身近なところに本を置くこと、つまり図書館を数多くつくる必要があるとともに、いろいろな機会をとらえ児童のためにえほんの会、お話会（ストーリーテリング）、読み聞かせ、本の紹介（ブックトーク）などを行うことがたいせつである。」<sup>(17)</sup>と述べている。

つまり、子どもの読書欲求を高めるには、図書館を利用する習慣を身に付けることが必要で、それには読み聞かせをすることが重要な言語行為だったのである。

### （3）子ども文庫の特異性

文庫の意義について、汐崎は「広義には、児童図書館は公立図書館という組織に限定されない。日本図書館協会が統計資料として毎年刊行する『日本の図書館』の調査対象である「公共図書館」には、私立の児童図書館も含まれている。「子どもがそこへくるとも、本を選ぶことも、選んだ本を読むことも借りて帰ることもすべて自由であるのが、子どもの図書館である」という小河内の定義に従えば、日本独自の読書施設である文庫も一種の児童図書館とみなすことができる。」<sup>(18)</sup>と述べている。本来、公共図書館は、無料で公費によって支えられ、法律に基づいて設置され運営される図書館である。文庫は、個人のお金で賄われ運営されている。文庫は、日本独特の児童図書館ともいえる。

子ども文庫は、住民が子どもの本を集め、地域の子どもたちに貸し出し等を行う。戦後全国各地に点々と発足し、1960年代後半からその数を意欲的に増やし、1974年では2064、1980年では4406となっている。<sup>(19)</sup>そして東京都の子ども文庫の数は、1958年には16だったが、1970年には55、1974年には487と増加していった。<sup>(20)</sup>当時の町立図書館の設置率は低く、地域に公共図書館が出来るのを待っていたら、子どもは本を読む機会がなくなってしまう。その危惧から、自分たちの手で子ども文庫をつくらうという強い大人たちの思いが、文庫活動の大きな原動力となっていったのである。

## 4 石井桃子とかつら文庫

### （1）かつら文庫設立の経緯

かつら文庫設立者の石井桃子について、その経歴を記す。石井桃子は、1929年に文芸春秋に入社し、仕事上の付き合いで親しくなった犬養毅邸を訪れ、2人の子どもに『クマのプーさん』<sup>(21)</sup>を読む。この時の『クマのプーさん』との出会いが、児童文学作家、翻訳家としての道を歩み始めるきっかけとなる。<sup>(22)</sup>1933年に文芸春秋を退社し、翻訳を続けながら1938年に白林少年館（出版社・私設図書館）を設立する。戦後、1950（昭和25）年に岩波書店に嘱託で入る。1954（昭和29）年、文芸評論家の坂西志保の薦めに応じ、ロックフェロー財団の奨学金を得て渡米する。留学先のアメリカでは、児童図書館員が児童サービスの一環として、多くの図書館で読み聞かせを行っていることを知る。同時に、子どもの本の状況と児童図書館の在り方を学んだのである。1955（昭和30）年帰国し、宮城県の小学校で本の読み聞かせをし、そこで大人が最初の部分を読み聞かせれば、漢字の読めない子や読解力の弱い子どもでも、自力で本を読み通すことができることが分かる。石井は、2年間、宮城県の小学校で読み聞かせをしていたが、その集団での読み聞かせの経験を踏まえて、1958（昭和33）年東京に戻り、私設の実験的なかつら文庫を開く。<sup>(23)</sup>

石井は、かつら文庫での7年間の活動を、『子どもの図書館』（石井桃子著 岩波新書 1965年）、にまとめて出版した。この本は、文庫活動に関する啓蒙書となり、それ以降の文庫の普及に大きな影響を与えた。石井の書いた『子どもの図書館』を読み、それに感銘を受けた大人たちが、次々と文庫を開き、文庫の数が増えていったのである。

石井が、日本の図書館や文庫活動に与えた影響は大きい。しかし石井は、最初から文庫を開こうと思った訳ではない。海外の知見を踏まえて、編集に携わる人間として、児童書の翻訳をする人間として子どもがどんな本を喜ぶかということを知るために文庫を開き、子どもと本を結ぶ付けるために自らが読み聞かせを行ったのである。

## 5 かつら文庫のお話会

### （1）かつら文庫7年間のあゆみ

かつら文庫は、石井桃子が、1954（昭和30）年から1年半の海外留学研修視察を終えて、1958（昭和33）年に、荻窪の自宅の一角を開放して始めた文庫である。<sup>(24)</sup>3月1日の文庫開設日の立て札は、ボール紙の枠に紙を貼りそれを棒に結び付けたもので、マジックインキで次のように書かれていた。

小学生のみなさん  
 いらっしやい  
 おはなしとスライドの会  
 3月1日(土) 2時から  
 来たい人は、中に入って  
 申し込んで下さい。  
 —かつら文庫—

(25)

かつら文庫は、土曜日、日曜日、夏休み等、子どもの幼稚園や学校がお休みの日に開かれた、会員制の文庫である。何故、会員制にして、土曜日と日曜日に文庫を開いたかということは、石井が「こちらが、文庫に専門にかかりきることはできないので、毎日では開けません。それから、開く日も、知らない子どもが、一度ふらりとやってきて、本を持って行って、それっきり返しにこないというのも困ります。場所がせまいし、本はなるべく、家にもって帰って、読んでもらい、そして返してもらいたいからです。また、ひとりの子どもが本を読んでゆく経路も後づけたいとおもいました。こう考えてくると、さりげない方法で、会員をつくるのが一番よさそうだとということになりました。」<sup>(26)</sup>と述べている。

文庫の部屋は、道から少し入った所にあり、日あたりも出はりの便も一番いい部屋で、石井は文庫の部屋のことを、「かつら文庫のためには、私の家で日当たりも、出入りの便も一番いい部屋を選びました。」<sup>(27)</sup>と述べている。この言葉や、初日の立て札にお話の時間が設けてある内容からみて、石井は子どもたちに、一番いい環境で、読書だけでなく本の読み聞かせを通して、本に親しんでもらうことに、重点をおいていたのである。

(資料 1)

読み聞かせをして人気のあった本のリスト (かつら文庫)<sup>(28)</sup>

(注)、題名、備考(石井の注釈)は、後藤が抽出して表にしたもので、まとめると以下のようになる。

題名	備考(文庫に残された記録)
『シナの五にんきょうだい』	文庫の始まりに、英語で書かれた本を、日本語で訳しながら読み、その後、家庭文庫研究会により、翻訳された。
『100まんびきのねこ』	
『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』	
『ちびくろ・さんぼ』	英語の本
『ひとまねこざる』	英語の本
『ちいさいおうち』	『ちびくろ・さんぼ』などと違って、先はどうなることかということで、ぐんぐんひきつけていくお話ではなく、子どもたちは静かに聞いている。
『きかんしゃやえもん』	日本のお話
『エルマーのぼうけん』	英語で書かれた、少し大きい子の為のお話で、子どもたちが次の週を待ちかねて聞いたので、その後、翻訳することを出版社にすすめた。
『砂の妖精』	英語で書かれた少し長いお話で、訳しかけていた本だったので、どのくらい子どもたちがわかってくれるか、おもしろがってくれるかを、じかに知りたいと思って、つづき物にして読んだ。
トルストイの『民話』	石井と田辺が、本を読んでやってその力におどろいた。「人は何でいけるか」「人には多くの土地があるか」「愛のいるところには神もいる」、などというお話に、子どもたちがどのくらいひき入れられるか、それは試してみないとわからない。最初のうち、ざわざわとざわめいている子どもたちの心は、5分もするうち、しーんとしずまって、一つの方向へ流れ出すという感じである。

## (2) かつら文庫の読み聞かせの特徴

かつら文庫は、読み聞かせに力を入れているが、それには幾つかの特徴がある。それは、以下の5点である。

1. 置いてある本は、石井が一冊一冊吟味したもので、漫画の本は置いていない。外国の本が半分ぐらいである。
2. 子どもたちは、そこにある本なら何を読んでも良く、1年生が5年生の本を読んでも、5年生が1年生の本を読んでも何も言わない。
3. 外国の本を、石井がその場で翻訳しながら子どもたちに読み聞かせるという、実験的な側面を持つ。
4. 石井以外にもお話のおねえさんが必ずいて、子どもたちが本を持って来れば、その子一人のために読み聞かせをする。
5. 長編などの読み聞かせを行う時は、半分までは読み聞かせてやるが、その後は自分で絵本や本を借りて、手にとって読むように言葉かけをする。

このように、かつら文庫での読み聞かせは、一般の文庫とは異なっていた。本棚には、石井が一冊一冊吟味した本が置いてある。石井の批評眼にかなった選りすぐった児童書の良書のみがおかれているのである。その贅沢な本の中から子どもたちは大人にも友達にも干渉されず、自分の好きな本を好きな時に声を出したり、目で追って読んでいく。読み聞かせで人気のあった本(資料1)は、外国の本が多く、石井はそれを翻訳しながら子どもたちに読み聞かせていた。石井と3代目おねえさんの田辺が、読み聞かせの時間に、子どもたちに繰り返し読んだ本の中で、石井も子どもたちも楽しい経験をしたという本が、何冊かある。これらの本を挙げてみる。

この中で、石井の翻訳した本は、『シナの五にんきょうだい』『100まんびきのねこ』『ちいさいおうち』『砂の妖精』である。これらは、現在でも多くの子どもたちに読まれており、これらの本が日本で出版されなかったら、子どもたちは外国の本を読めずにいた。子どもたちに、外国の本の楽しさを伝えた石井の功績は大きいといえる。『砂の妖精』は、子どもたちがどのくらい分かってくれるかを知りたくて読んだとあるが、子どもたちの面白がる反応が良かったので、本にしたのだろう。石井たちは、定期的に日曜日の午後の時間を読み聞かせの時間と決めて、その時間までに、大体の準備をしておいた。すると待っていたように、5人から8人ぐらいの子どもが集まり、最初に5分ぐらいの幼児むきの本を読み、次に、長くて少し難しい本を読んだ。

子どもたちに読んだ本は、外国の本が多く、それを石井たちは、日本語に訳しながら話している。トルストイのような難しい本でも、これは子どもには無理だからと、最初から決めつけるのではなく、分かりやすいように話している。きちんと話せば、子どもたちが夢中になって、話に惹きつけられているのが分かる。本に描かれた絵をみながら、子どもたちは、石井たちの話す物語に引き込まれていったのだろう。そして石井や田辺も、声を出して本を読むことにより、子どもたちだけでなく、自分たちも一緒になって楽しみ、また教えられることもあったのではないかと、思われる。最初は本に興味を持っていない子どもでも、興味のある本を読み聞かせすれば、段々と本に興味を持ってくる。そして、子どもに本の感想を求めるのではなく、好きな時に好きなだけ読めるように、本のある環境を

整えていく。子どもが、本を読んでと持って来れば、半分は読んでやり、後は自分で読めるようにする。強制的に本を読ませるのではなく、本と一緒に読んでやってその楽しさを子どもに伝える。子どもが、自分から本を読みたいという環境を整える。このような石井の考え方が、子どもを読書が好きなき子どもへと導いていったのではないか。

### (3) 貸出リストを用いた事例

また、子どもたちの貸し出しリストから、石井が読み聞かせをした後、どのような本を借りて読書に結び付いたのかを、かつら文庫の実例より3人の子どもの事例をもとにまとめた。3人とは、次の子どもである。

事例①、本を読む習慣があまりなかったM.S君。

事例②、時々だが本を読んでいたK子ちゃん。

事例③、最初から本を読むことが困難だったM子ちゃん。

**事例①** 兄・M.S(5歳)、弟・M.B(3歳)の兄弟が、かつら文庫に来た当時は、絵本を引っ張り出しては床に散らかすような、落ち着きのない子どもであった。しかし半年を過ぎる頃には、冒険ものなどの本を借りていき、自分から弟に本を読んでやるようになる。自分が本を読んでもらう楽しさが分かったので、読んであげる楽しさも知ることになったと思われる。M.S君が『いやいやえん』を借りた時、石井は「読めたのか?文庫で読んでもらったので、気に入って持って行ったのだろう」と所見を述べている。<sup>(29)</sup>(M.S君の貸し出しリストの一部を(資料2)に掲載)かつら文庫の特徴の一つである、読み聞かせをしてもらい、その後自分から本を手取るという、一つの効果があらわれたと思われる。

### (資料 2)

#### M.S君の1963年3月から1965年2月までの貸し出しリスト(かつら文庫)<sup>(30)</sup>

(注)、日付、借りた本の題名、備考(石井の注釈)は、後藤が抽出して表にしたものである。

備考は、文庫の記録に残されたものをそのまま記してある。

日付	借りた本の題名	備考(文庫に残された記録)
1963年 3月9日	『たろうのお出かけ』『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』『かずのほん1 1-10まで』	『かずのほん1 1-10まで』は、母親の選択。
3月16日	『学習理科図鑑』『ぶーふーのちょうちとり』『3びきのくま』	
3月23日	『ヘンゼルとグレーテル』『学習画報4月号』『人類の誕生』	全部センパイが借りて返したばかりのものを、そっくり借りる。
3月24日	『ヘリコプターのおんきち』『ちいさいおうち』『地球が生まれた』	『地球が生まれた』は、センパイがおもしろいと言ってみせたので持っていく。『人類の誕生』と『地球が生まれた』は、その中の大昔の人の絵が魅力で借りた。
4月7日	『きかんしゃやえもん』『なかよし特急』『青い鳥』	『なかよし特急』は、大きい子の本。本文には関係なく、汽車の写真があるので借りた。
4月13日	『100まんびきのねこ』『学習理科図鑑』『うちゅうの7にんきょうだい』	
4月20日	『100まんびきのねこ』『うさぎのみみはなぜながい』『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』	
4月27日	『ヘンゼルとグレーテル』『まいごのふたご』『風の又三郎』	『風の又三郎』は、どうして借りたのか?よんでもらったのか?
5月4日	『おやすみなさいのほん』『さざなみれきし物語3』『おおきなかぬー』『どうぶつ会議』	『さざなみれきし物語3』は、この時以来、この本に大変な興味を持つ。昔の武士のさし絵があったから。話は読んでもらったよし。
	……………(中略)……………	
9月7日	『たんけん』『ロビンフッドの冒険』『サボテン』	
9月14日	『ゆきむすめ』『いやいやえん』『Umbrella』	『いやいやえん』は、読めたのか?文庫で読んでもらったので、気に入って持っていったのだろう。

**事例②** K子ちゃん（小学校1年生）は、かつら文庫に来た当時は、絵本などの文字の大きい読みやすい本を読んでいた。しかし半年を過ぎる頃には、『日本のむかしばなし三年生』などの学年が上の本を借りていくようになる。K子ちゃんは、3人兄弟のまんなかで、兄のI君は、1960年12月の小学校3年生から、友達に連れられてかつら文庫に通うようになり、K子ちゃんは、1961年4月の小学校入学と同時に兄に連れられて、かつら文庫に来るようになった。その後、1962年の春には、弟のS君が5歳（幼稚園）で、文庫に来るようになる。何故、3人揃ってかつら文庫に入ったかという、母親たちが雑談している時に、こどもたちが読みたがるだけの本を買ってやるのは大変だという話から、かつら文庫の名前が話にのぼり、母親に行きなさいと言われてたとのことである。<sup>(31)</sup> に入った当時、K子ちゃんは本の虫という感じではなかったが、2学期になる頃には、長い話を読むようになっていた。ひと月に1度ぐらい来て、本を借りていき、石井や田辺とも仲良くなり、田辺が話してくれるお話もよく聞くようになった。

**事例③** 本を読めなかったM子ちゃんは、お話のおねえさんに『世界の文学1年生』を読んでもらったのをきっかけに、自分がお話の世界の人物になったような気持ちになり、その後に自分でも読んでみたいと本を沢山借りていくようになる。M子ちゃんは、かつら文庫が開かれて3か月後に、かつら文庫のことが書かれている雑誌を見た父親が、ぜひ会員にしてもらいたいということやってきた。来た当初は、ひらがなをひとつひとつ別々に読めるだけで、字がいくつかが繋がる文だと、すぐにくたびれて、「読んでよ、読んでよ」と、本を持ってくるような子どもである。<sup>(32)</sup> 小さい子どもでも、黙って本を読んでいるのに、自分で選んだ本を持ってきて大人の膝の上に乗る、文庫の中でも甘ったれっ子であった。

石井たちは、本を読んでもらいたがれば1冊は読んでやり、「あとは自分で読みなさい」と言って、その後は子どもたちに任せる。<sup>(33)</sup> その頃読んでもらいたがっていた本は、おもに絵本ばかりで『ぞうさんばばーる』『ちいさいおうち』『まりーちゃんとひつじ』などである。その後、一度読んであげた本は、何とか自分で字を追いつつながら、読めるようになった。しかし黙読は難しく、声を出して読み、分からない字が出てくるともどかしくなり、途中で放り出すことが多かった。しかし、夏休みを過ぎた頃から、絵本だけでなく短いお話も読めるようになり、『世界の文学1年生』を、お話のおねえさんに読んでもらうと、うっとり聞いて「おひめさまの出てるお話は全部好き！」<sup>(34)</sup> と言っ

て、その本を借りていった。これを境に、M子ちゃんの読書の歯車は、油が注がれたように勢いよく回り出し、次から次へと厚い本を借りていくようになった。1年後には、『ラングミどりいろの童話集』をすらすら黙読できるようになり、その後は、3・4年生が読むような『世界文学全集』（あかね書房）の『アメリカ童話集』や『イギリス童話集』を読むようになった。ほとんど字も読めずに、人に甘えることしかできなかったM子ちゃんが、1年後には長編の本を読めるようになる。石井たちが1冊だけ本を読んで、あとは子どもが自分で読みたいように興味を持っていく。これは、本に親しみを持たせるきっかけが大事で、沢山の本が揃っていた環境があったからこそ、できたことである。このことについて石井は、「私たちは、M子ちゃんにとくにどのような教育をほどこしたというわけでもありません。M子ちゃんという子を1人前にあつかい、本のあるところにほうりだしただけです。」<sup>(35)</sup> と述べている。

このように、最初は本に興味のない子や、自分で本を読むことができない子どもも多くいた。しかし、かつら文庫に通い、お話の時間だけでなく、いつでも本を読んでもらえる環境にいるうちに、段々と本の楽しさが分かるようになった。そして、読み聞かせをしてもらううちに、自分にあつた本を知り、自分でも読んでみようと思えるようになるのである。

## 6 かつら文庫の位置

現在、日本の図書館・文庫では児童サービスが行われている。その一環として読み聞かせが行われているが、それは読書に親しんでもらうため、また、図書館・文庫に足を運んでもらうためである。戦後の貧しい中、子どもたちの周りに本はなかった。本を読みたくても家では買ってもらえず、自分の住んでいる地域に図書館が無かったのである。そんな中、石井桃子の著した『子どもの図書館』（石井桃子著 岩波新書 1965年）が、子どもに本を読んでもらいたい母親たちの原動力となり、次々と全国で文庫が出来ていった。しかし石井は、子ども文庫を広めようとしてこの本を書いたのではない。読書が、子どもにどんな役割を果たしているか、それを保証する場の図書館がいかに貧しいかを訴えた。

かつら文庫は現在、東京子ども図書館の分館になっているが、これは石井桃子のかつら文庫、土屋滋子のふたつの土屋児童文庫、松岡享子の松の実文庫が合併してできたものである。石井が亡くなった時（2008年4月2日、101歳）、杉並区立中央図書館では、「石井桃子追悼展」が行われ、2



階の会議室で石井の著書や手紙などが展示された。そして児童コーナーでは、石井の書いた本を、お話の時間に子どもたちに読み聞かせた。また杉並区では、杉並名誉区民を顕彰し（101歳）、杉並区役所の入り口には、石井の大きな写真が飾られている。石井が杉並区に残した功績は大きいといえる。

今でもかつら文庫は、図書館や文庫に携わっている人たちにとってお手本になる場所で、お話や読み聞かせの参考にしたいと、沢山の人が訪れる。建物は改装されたが、玄関の左側に「かつら（桂）文庫」の名前の由来となった月桂樹の木が植えられている。1階は児童コーナーで、テーブルと椅子が置いてあり、子どもたちはそこで本を読み、隣の部屋では読み聞かせが行われている。これは、当時と同じ場所である。そして2階は、石井桃子がかつて書斎として使っていた部屋があり、生前の写真が飾られている。

論者は、かつら文庫で全国から訪れる人々にあうことができた。さらに、1階のお話の部屋で（平成29年4月25日）、石井のドキュメンタリー映画、「石井桃子さんがはじめた小さな図書室、かつら文庫」（森英雄、DoDo企画 Kasabutakun FILM制作 1958年～2014年）、の映画を見ることができた。この映画には、生前の石井や文庫のおねえさん、等が写っている。この映画で、石井はかつら文庫開設時の様子を、「垣根の所に、通りがかりの子どもさんに、土、日にはここに本がありますが、読みにいらっしやいと貼り紙をしたんですよ。そしたら最初の日に来てくれると思ってましたら、近所の子どもが12～3人。」（杉並区立中央図書館主催、「石井桃子展」、での杉並ニュースの取材の映像、2001年）、と述べていた。石井の晩年の時であったが、優しい顔立ちで、温かみのある良く通るしっかりした声でお話をされていた。子どもたちに読み聞かせをする時も、このような優しいしっかりとした声で話されていたと思われる。そして初代おねえさんの岸田節子（旧姓、狩野）は、森英雄のインタビュー（2008年）に次のように述べている。「本は、頂いた本だの買った本だの、それから大分絵本はその頃あまりなくて、原書。絵本は原書の本がありました。『機関車ちゅうちゅう』とか、『キュリアス・ジョージ』（注、おさるのジョージ）だとか『シナの5人きょうだい』とか。原本をこうやって見せて、それでそこを訳すようにして日本語にして、読み聞かせを、絵を見せながらやったんですけど、本のできるまでは、そういうことを全部致しました。」と、丁寧なしっかりした言葉で、当時の読み聞かせの様子を語っていた。

子どもに読ませる本の少ない時代に、石井は外国の本を

翻訳しながら子どもたちに読み聞かせをした。それが一冊の本になり、現在も子どもたちに読み継がれている。読み聞かせは、現在では図書館・文庫で行われている。その背景には児童サービスの導入と普及があると考えられよう。

かつら文庫の事例で述べたように、読み聞かせをしてもらい、自分から進んで読書をするようになった子どもの存在に目を向けるべきである。最初は、字の読めなかった子ども、本に興味のなかった子どもも、読み聞かせをもらううちに、本の楽しさを知り、読書が好きになる。児童サービスの中でもかつら文庫における行動は理想的な姿である。石井の行った行動は、当時の物理的な制約の伴う公共図書館の次元を超えており、子どもに良い本を読んでもらいたいという、石井の情熱があったからできたともいえよう。ともあれ、かつら文庫を端緒として多くの図書館・文庫関係者の方たちの志により、広く読み聞かせが行われていくようになった。読み聞かせは、子どもと本を結び付け、読書が好きな子どもには必要なのだということを示しているのである。（後藤利恵子）

## 7 かつら文庫の今日性

かつら文庫は、1958（昭和33）年に児童文学翻訳家・児童文学論者・児童文学実作者・児童文学図書の編集者でもある石井桃子が東京都杉並区荻窪の自宅に、選書収集した児童書や絵本を、地域の会員の子どもの達に公開するために設けた文庫である。そこでは子どもに本を手渡すためのボランティアの係員がおり、定期的にイベントも開催されていた。一方、石井桃子自身が児童書の翻訳のために、子どもの直接的な反応を確かめる事にも活用されていた。

このかつら文庫は、篤志家や篤志団体が自由に運営し、地域の子どものために読書を提供する地域活動である、多様な言語活動を伴う地域のボランティア活動の一形態である。1960年代から1970年代はそういった文庫の萌芽期から成長期に該当するといえるのである。篤志家の家庭で開催されるものは、家庭文庫と呼ばれ、かつら文庫もまさにその一例なのである。他方、地域の公共の場などで実施されている場合は地域文庫、親と子の読書運動を推進する活動によるものは、親子文庫と呼ばれていた。すべての文庫に共通するのは、読書対象となる図書については運営母体が主として自費で購入するということである。近年の文庫の一部では、寄付や公共図書館からの提供も行われるようになり、伊藤忠財団は「子ども文庫助成事業」を1975（昭和50）年から開始している。

児童図書館活動の推進者であり、児童図書館研究会の中

心メンバーであった清水正三は、東京都の1960（昭和35）年代の文庫活動の特筆すべき動きとして、次の6点をあげている。<sup>(36)</sup>

- 1) 石井桃子の『子どもの図書館』（岩波新書）の刊行（65年）
- 2) 多摩地区における地域文庫の発展
- 3) 『日本親子読書センター』の発足（67年）
- 4) 『ねりま地域文庫・読書サークルの連絡会』の結成（69年）
- 5) 日野立図書館に代表される多摩地区の図書館活動
- 6) 児童文学者、作家、児童図書館研究会（児図研）図書館問題研究会（図問研）などの文庫に対する関心と文庫・図書館づくり運動への参加及び『子どもの本研究会』の活動など。

石井桃子の著した『子ども図書館』の刊行は、かつら文庫活動の成果を示すのみならず、全国の読み聞かせ活動を牽引するものとなっていったことが推察できる。（注37）

かつら文庫活動の価値は、その読み聞かせの先駆性にある。（注38）かつら文庫で石井が示した読み聞かせの精神は一人一人の顔の見えにくい集団を対照とした当時の一般的な読み聞かせとは大きな異なりがある。石井桃子の文庫では、あくまでも、一人一人の子どもの個性に沿って本を選ぶことが大前提であった。そのことを踏まえて、一人の個を尊重する、子どもに寄り添った読み聞かせが行われた。これは、子ども各自の読みを自立させることの重要視でもある。つまり、石井桃子は、かつら文庫において、それぞれの子どもの本を薦めてその本の世界へいざない、その過程で、読み聞かせという言語行為を用いることを試みていたのである。

ここにみるように、どのような子どもも、ひとりの読者として尊重した個の重視の精神は、かつら文庫の今日性を示すものといえよう。（有働玲子）

## 引用文献

- (1) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 『図書館情報学会用語辞典 第4版』丸善出版 2013年12月 pp.95～96
- (2) 伊藤昭次・山本昭和 『公立図書館の役割を考える』日本図書館研究会 2000年2月 p.65
- (3) 小河内芳子 『児童図書館と私』上巻 日外アソシエーツ 1981年7月 pp.1～246
- (4) (3)と同上 p.199
- (5) 松居直 『絵本の与えかた』福音館書店 2001年1

- 月 p.3
- (6) 近藤文里・辻本千佳子 「絵本の読み聞かせに関する基礎研究とADHD児教育への応用（1）—研究の展望と本研究の課題」 滋賀大学教育学部紀要, 教育科学 No.56 2006年 p.66
- (7) 松岡享子 『えほんのせかい こどものせかい』東京子ども図書館 2010年5月 p.10
- (8) 秋田喜代美 『読書の発達過程』 風間書房 1997年12月 p.26
- (9) (8)と同上 p.90
- (10) 石井桃子 『石井桃子集5 新編子どもの図書館』岩波書店 1999年8月 pp.1～303
- (11) 石井桃子 『新しいおとな』河出書房新社 2014年3月 p.24
- (12) 松岡享子 『子どもと本』 岩波書店 2016年3月 p.209
- (13) (12)と同上 P.211
- (14) (12)と同上 p.212
- (15) 汐崎順子 『児童サービスの歴史』 創元社 2007年6月 p.194
- (16) 小河内芳子 『子どもの図書館の運営』 日本図書館協会 1989年4月 p.24
- (17) 日本図書館協会『市民の図書館 増補版』日本図書館協会 1980年12月 pp.90～91
- (18) 汐崎順子 『児童サービスの歴史』 創元社 2007年6月 p.14
- (19) 日本図書館協会児童青少年委員会・児童図書館サービス編集委員会 『児童図書館サービス1』 日本図書館協会 2011年9月 p.46
- (20) 児童図書館研究会 『児童図書館のあゆみ—児童図書館研究会50年史』 教育史料出版会 2004年3月 p.245
- (21) A.A. ミルン（文）、E.H シェパード（絵）、石井桃子（訳）『クマのプーさん』 岩波書店 1968年12月 pp.1～78
- (22) 汐崎順子・尾野三千代 『「喜びの地下水」をもとめて—石井桃子が児童図書館にのこしたもの—』 児童図書館研究会 2010年3月 pp.3～6
- (23) (22)と同上 pp.7～11。なお、この間の経緯として、海外の児童図書との礎と呼ばれる人々との交流及び海外での児童図書館活動の見聞等が背景にある。後に、リリアン・H・スミスの思想を『児童文学論』として日本に紹介することなどを行う。

- (24) 米谷優子 「児童図書出版と図書館—石井桃子と図書館のかかわりから」 情報学 Vol.no2 2012年 p.18
- (25) 石井桃子 『石井桃子集5 新編子どもの図書館』  
岩波書店 1999年8月 p.19
- (26) (25) と同上 p.18
- (27) (25) と同上 p.17
- (28) (25) と同上 pp.172～175
- (29) (25) と同上 p.75
- (30) (25) と同上 pp.72～77
- (31) (25) と同上 p.104
- (32) 石井桃子 『子どもの読書の導き方』 国土社 1963  
年9月 p.162
- (33) (32) と同上 p.164
- (34) (32) と同上 p.166
- (35) (32) と同上 p.167
- (36) 清水正三 「東京を中心とした戦後文庫運動の覚書—  
敗戦から1970年まで」 日本図書館協会「現代の図書館」17(2) 1976.6 p.64
- (37) 吉田右子 「1960年代から1970年代の子ども文庫運動  
の再検討」 「日本図書館情報学会誌」 Vol.50, No.3,  
2004, p.103～111
- (38) 1984年8月に刊行された、全国子ども文庫調査実行  
委員会の「子どもの豊かさを求めて—全国子ども文庫  
調査報告書—」(日本図書館協会, p.27)によると、文  
庫の日常の活動で読み聞かせは、20%にもなってお  
り、貸し出しの次に行う主要な活動である。